

黒の剣士と白い悪魔

雪染遊真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうも新しく小説投稿する雪染遊真です。

好きなアニメをクロスオーバーさせており

タグ追加、変更の可能性が高いです

更新速度は遅いですが見てくれると嬉しいです。

よろしく願います。

目次

設定	1
放課後	6
家にて	10
リンクスタート	13
ゲーム(日常編)	19

ヒロイン

???

弟大好きトレジャーハンター

空閑琴音 (フィリア)

S A O 14才↓16才

弟大好きトレジャーハンター

原作と違い名字が竹宮ではなく空閑

かなりのブラコンよくユーマに抱きつく

弟以外に好きな人がいるらしいが?……

S A Oはベータテスター

使う武器 短剣

好きなもの

弟 ゲーム 弟がしてることを見ること サッカー観戦

嫌いな事 (物)

人の努力を馬鹿にすること

女顔のイケメン

桐ヶ谷和人 (キリト)

S A O 13才↓15才

自分はイケメンでは無いと思ってるが実際モテる

けど気づかない知らぬ間に女子をおとしている事にも

気づかないまさに唐変木

遊真の幼馴染

S A Oはベータテスター

遊真、八幡、アラタと一緒にサッカーをしてるため

原作と違い運動神経は良い

ポジションはFW左ウイング

利き足 右足

使う武器 片手直剣、二刀流

好きなもの

アスナ ゲーム サッカー

嫌いな事 (物)

仲間外れ

ヒロイン

アスナ

自称プロボッチ

比企谷八幡 (ハチ)

SAOI3才↓15才

原作と違いぼっちでは無いが自己犠牲の精神があり

心優しいのは変わらず サッカーの事になると結構喋る

遊真の幼馴染

愛称はハチ、ハッチ

SAOはベータテスター

サッカーポジションは CF

利き足 右足

使う武器 片手直剣

好きなもの

ゲーム サッカー MAXコーヒー

嫌いな事(物)

勝手に同情される事

ヒロイン

ユキノ

3バカー1号

瀬名アラタ (アラタ)

SAOI3才↓15才

遊真の幼馴染一つ下に妹がいる

ゲーマーでもありなおかつ

結構なサッカーバカでもある

遊真達とよくサッカーのことを喋っている

ツツコミ担当、たまにボケる

(ヒロアカの上鳴みたいな感じ)

SAOはベータテスターでは無い

サッカーポジションはMF トップ下、ボランチ ST
利き足 左足
使う武器 槍

(仮面ライダーガイムにあるバナスピアーみたいな感じの形)

好きなもの

ゲーム サッカー 妹

嫌いな事(物)

仲間を馬鹿にされる事

ヒロイン

???

苦勞人

日向創 (ハジメ)

SAOI5才↓17才

とりあえずなにがあるかとフォローに行く

良く問題に巻き込まれる

原作と違い七海(チアキ)と幼馴染だが

才能が欲しいと思っっているのは変わらない

サッカーのポジションはトップ下 ボランチ

利き足 右足

使う武器 片手直剣

好きなもの

草餅

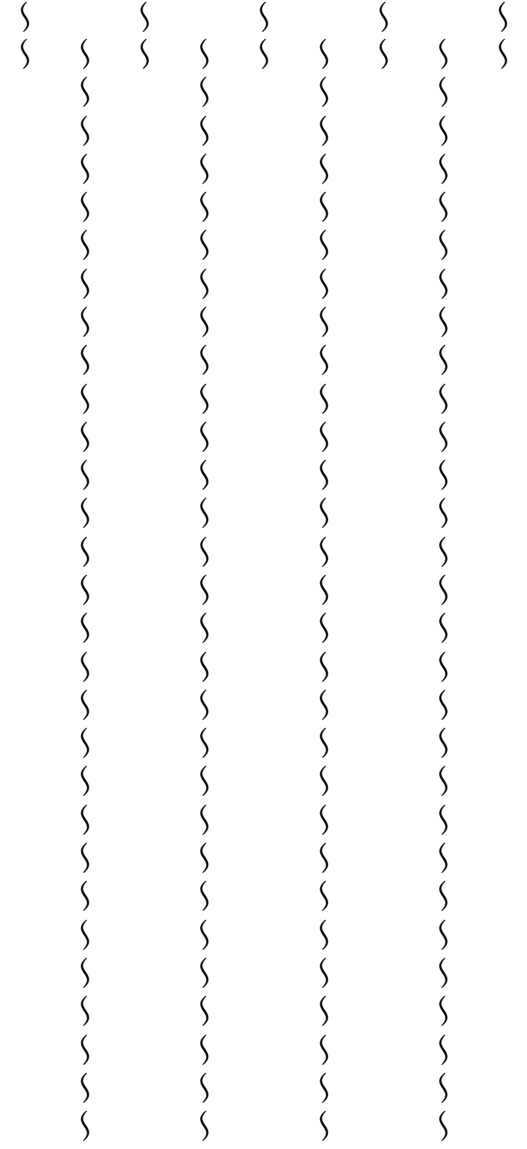
嫌いな事(物)

桜餅 才能が無い事を言われる事

ヒロイン

チアキ

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~





## 放課後

無限の蒼穹に浮かぶ巨大な石と鉄の城。

それがこの世界の全て。

城の名前は《アインクラッド》剣と戦闘の世界。

またの名を

《ソードアートオンライン》。

とある学校の放課後

「あー今週の学校も乗りきった〜」  
「だな」

授業終了のチャイムが鳴った後近くの席にいたアラタと和人がそう言った。

まあ確かに学校はめんどくさい、大抵の奴は友達と喋ることや遊ぶことがこの学校に来る理由である

「けど休日挟んだらまた学校だろ」

「なんでそんなネガティブな思考なんだよw」

確かにネガティブ思考だ、だがハチの言いたいことはわかる  
俺もそう思う、なぜ休日は2日しかないのだろう  
週5日になればいいのだが

「別に良いだろ学校には楽しいことが沢山あるぜ？」

「いや別に全員がそうって訳じゃないだろ？ハチがそうないように」

「……………それもそうか」

「みとめるのね……………」

和人がそう言うとき少し笑いが起きる

「学校の何処が楽しいんだ、無理矢理勉強させられる場所のどこが楽しいんだ。」

「まあ確かに」

「ハハハ……………」

そう話していると明日始まる《ソードアート・オンライン》の話題になる。

「そういうばついに明日だな《ソードアート・オンライン》。」

「そうだな……………そういうば小町が親父に買わせるとか言ってたな。」

「まじか小町ちゃんすげえなw」

「あ……………俺のことも琴姉が「遊真のぶんは絶対お父さんにどうにかしてもらおうからー」とか言ってたな。」

「琴音さん……………相変わらずのブラコンだな」

「まあ琴姉を姉に持てて良かった。」

「出たシスコン」

「そうだよ、なんか悪いか？」

「なんで誇らしげなんだよ」

「まあいいじゃんそれが遊真の良いところなんだから」

「まあそうか」

「いやいいところなのか？」

そうたあいのない会話をしていると最終下校時刻が迫っていた

「もうこんな時間か、じゃあまた来週。」

「俺も行く……お前らは行かないのか」

「俺らは琴音さんを待つから良いよ先に行つてて。」

「OKじゃあな。」

「じゃあな。」

ハチとアラタはそう言うのと教室から出て行つた

「そーいや遊真SAOの中の集合する場所はどーする?」

「和人と琴姉で決めといてくれ、俺わからんし。」

「OKわかつた。」

そー喋っているといきなり教室の扉が開いた

「ごめん和人、遊真、遅れた〜」

「別に大丈夫だよー琴姉」

「じゃあ帰りますか」

「おー!」

~~~~~

「じゃあ俺こつちだから」

《ソードアート・オンライン》の話の話ながら歩いていると

もう家に着いたらしいやはり楽しいことは、時間が経つのが早く感じるな

「そうだな、じゃあな。」

「ちよつと2人ともキャラネーム聞いてないよ」

「あ、そうだった」

「うっかりしてたな」

「もー……まあいいや私は《フィリア》ね」

「俺は《ユーマ》だ。」

「俺は《キリト》だそれじゃあまた明日」

「じゃあね、また明日」

「バイバイ」

和人はそう言いながら家に入って行った

「私たちも自分の家に帰ろうか。」

「そうだな」

そう言いながら俺と琴姉は家の扉を開けた

家にて

「ただいまー」

「お帰り〜」

今お帰りの挨拶をしてくれたのが俺と琴姉の母、空閑ちさ
料理、洗濯など家事を完璧にこなす主婦だ

仕事もしてるみたいだが何をしているか教えてくれない

「夕ご飯もうできてるけど食べる？」

「うん食べるよ」

「遊真は？」

「食べるよ」

そう言い俺たちはリビングに足を進めた

「そういえば親父は？」

「ん？仕事だって、明日稼働日のSAOの事を

手伝うらしいよー。そういえば明日からだね

ソードアートオンライン、どう？楽しみ？」

良い笑顔だというのが本当に俺らの母なのか？

見た目が完全に20代なんだが

「そりや楽しみだよ、ベータテストには琴姉しか

当たらなかつたから俺出来なかつたし」

「そんな事言ってる私のアカウント使って何回かやってたよね？」

「バレてるのね……」

マジかかなり気おつけたはずが普通に気づかれてたのか

プライバシーってもんが無いな……いや使ってる俺もか

「それで大丈夫だった？」

「何がだよ」

「女の子のAvatarで違和感無かった？興奮した？」

「興奮しないぞ別に……………違和感はなかったぞ、

あーでもあえて言うならあれだな……………胸が重かったな
何？女っていつもあんな重いもんつけてるの？大変だね」

実に大変だった胸に重りでも付いてるのかと思った

……………もう絶対に女のアバターになりたく無い

「もー遊真それセクハラだよー、

まあ遊真なら別に大丈夫だけどね」

「ちなみに私も大丈夫だよ」

「おいちよつとお2人さん自分の弟と子供だよ何考えてんの」

「えー別に良いじゃん私は遊真にそういう事されても良いよ？」

「私も大丈夫だよ、私達は別に遊真にそういう事

されても大丈夫、むしろ来て欲しいな、ねーお母さん？」

「そうだねー」

ちよつ、なんて事言うんだスタイルの良い2人に迫られたら

絶対に無理だ、なんだったら理性が無くなるまでである

本当、だれか助けて ……………なんかハチみたくなってる気がする

「まあこの話はこれくらいにして、話は変わるけど

遊真と琴音以外だと誰がログインするの？」

「え？あー、和人にアラタ、倚凜、それにハチぐらいかな？」

あーあと紅葉もやるって言ってたなそういえば」

「あとカゲくん空亜さんにつむぎちゃんもやるって言ってたよ」

「多いね……………」

「まあ確かに、つても和人とアラタはベータテスターだし

何人かは影浦先輩に頼んだらしいけど」

「うわあ……………それ絶対カゲくん大変だったよね」

確かにアレはカゲさん大変そうだったな

というかみんなカゲさんに頼りすぎだ

……………今度マツ缶あげよう

「その日はカゲさん休んで行くって言ってて、

それでみんながついでにお願いしたって感じだな

まあもちろん最初はしぶってたけど結局折れちゃった」

「なんで折れたん？」

「結局後輩に頼られるのが嬉しいんだよ多分」

「最初はサイドエフェクトの事もあってか

かかわるなオーラ凄かったけど最近丸くなったよなあカゲ先輩」
「だね」

そうたわいもない話をしながら俺達は夕食を食べ進めていった

リンクスタート

♪♪♪♪♪

「ん？電話か誰だ？こんな時間に？」

現在時刻夜9時45分こんな時間に電話をかけてきて

俺の睡眠時間を削る不届き者は誰だ……………あ、つむぎか

「どうしたつむぎ？」

『もーどうしたもこうしたも無いよー』

なんでSAOやる事教えてくれ無かったの？』

「あれ？言って無かったっけ？」

『もー言って無いよ今アラタ君から聞いたばかりだよ』

はて？言った気がするが……………あ、琴葉達に伝えた時

つむぎ居なかったなそういえば

「悪いな、貸しにしといてくれ」

『もー……………まあ良いけどさ』

「で要件はそれだけか？」

『あつ忘れてた、要件はね明日SAO一緒にやろうって思って

あ、琴葉ちゃんと空亜さんも一緒にね』

……………なんか女子が多いな、何故に？まあいいか

「あー……………琴姉と和人とやる約束してるんだ

一緒に良いなら良いぞ」

『うんそれで良いよ、じゃあねまた明日おやすみ遊真くん』

「ああおやすみ」

「んく……………朝か？」

ムニユ

「うん？なんだ？」

昨日寝るときに抱き枕なんて入れた覚えないぞ俺

というか抱き枕持っていないし何だよまったく

「えへへ……………zzzz」

「……………は？」

いや何故に琴姉がここに？何？ブラコンがこじれた？いやいつも
どうりだけどさ母さんに見つかったらまた「由々しき事態だわー」っ
て騒がれる

「ちよ琴姉起きろって何で俺にくつついてんの」

「んく遊真……………激しいよー」

「いやどんな夢見てんだよ起きろって」

「うーん何？……………あれ遊真何で服着てるの？」

「いや何でだよ」

「？……………は！まさか夢？」

「いや当たり前でしょ琴姉が想像してる事

何て起きてないからなブラコンを拗らせすぎ」

まったく琴姉は……………たまに布団の中に潜り込んでくる事は

あったけど最近は無かったから油断した

「えー遊真とそういう事したかったのに」

「いやちよつと琴音さん？姉弟だしそんな事しないからね？

母さんに見つかっただらどうする気だよよく家政婦は見た！

見たいなタイミングでよく見つかるんだから」

「あー遊真？言いづらいんだけどさ……………お母さんこっちみてるよ」

「へ……………あ」

「ゆ、由々しき事態だわー京助ー」

「いや誤解だからね？ちよつとまて！」

「私はまあ良いけどね」

「いやいやヤバイでしょ、まあそれは置いてとりあえず誤解ときに行くぞ」

「はい」

「もーまったく琴音は遊真の事になるといつもこうなんだから勘違いしちゃったじゃないの」

「あはは……ごめんなさい」

「いやちさもちさで早とちりし過ぎだと思うが」

「えーそうかな?」

「たまに琴音が夜遊真の部屋にこっそり入って行くのを」

何回か見ている、多分琴音なりの愛情表現じゃないか?」

いやどんな愛情表現だよ、何?

ハチが言うところの千葉の兄妹かな?

あ、姉弟か

「いや愛情表現とかのレベルじゃないからね、

布団に入るのは姉弟の一線を超えちゃうよ」

「それもそうか」

「いや軽くね?というか完全にアウトだから親父からも琴姉に言っただが欲しいんだけど」

「だがそう言う遊真もまんざらでも無いんじゃないか?」

「まあちよつとはね。」

「否定しないのね………」

まあ俺も男だしそういうのは役得と言うか何というか

「なら遊真にそう言う事して良いの?」

「二いやダメ(だよ)(だ)(よ)」「」

「えーケチちよつとくらい良いじゃん」

「いやダメだからね」

まったくうちの姉は何を考えてるのか……

「話は変わるけど今日は琴音と遊真は1時まで何をするの?」

「家でゴロゴロしておくよ」

「同じく」

「そっか私と京助は仕事でいないからちゃんと戸締りするのよ

じやなきや由々しき事態になっちゃうからね」

「わかってるよ、だから安心して仕事に行きなよ………つつうかいの?・もう時間だけど?」

「あ、まずい急がなきや」

「あはは………」

「慌ただしいな………」

「だね………」

「俺らもS A Oの準備始める?」

「そうだねお母さんみたいにギリギリで準備とかはやりたく無いし」

「よし準備完了つと」

今は12時45分サービス開始15分前だ

こんなに早く準備するなんて流石俺

まだ時間あるしつむぎと話すか

♪♪♪♪

『何遊真くん?』

「いやあと15分暇だからつむぎと喋ろうかなと」

『あーそういう事ね、私は全然良いよ………やった遊真くと喋れる』

「ん?何か言ったか?」

『い、いや別に何も言っていないよ、それより何話す?』

何で焦ったんだ?まあ良いか

「んじゃあ今日の朝会った事喋るわ」

『うん良いよ』

「夜確認した時は一人だったはずなんだけど、何故か琴姉が布団に入ってたって言う事があった。」

『え!?遊真くと琴音さんってそういう関係だったの!?私の入り込むとこ無いじゃん』

いや姉弟だからあるわけ無いだろうが、まあ普通勘違いするだろうけど

「いや違うからただの添い寝みたいなものだから………って何が入り込むとこが無いんだ?」

『え?あ、いやあのえーと………そう!今から会う時にどんな顔すれば良いのかなって思ってたさ』

「ふーんそういう事か、まあ琴姉とはそんな関係じゃないから安心しろいつも通りの琴姉のシスコンが暴走しただけだからな」

『なんだ良かった』

何かすげーほっとしてるなそんなに心配なのか?

「当たり前でしょうが、本当にそんな事したら捕まっちゃうだろ?」

『まあそれもそうだね………あ、そろそろ時間だね』

「本当だな、んじゃ切るわまた後で」

『じゃあまた後でね〜』

「じゃあな」

もう時間だ準備しないとな………つーかなんでつむぎはあんなに焦ったんだ？まあ良いか今はSAOだ

「よし準備完了」

あとは頭にナーブギアを被って時間を待っただけだ

楽しみだな、何からしようかな？まあとりあえずは和人達とレベル上げかな………おっと時間か

時間まで5……4……3……2……1……0

「リンクスタート」

ゲーム（日常編）

「これがゲームの中か」

データで出来てるとは思えないなこれはまじですげえな

そりゃあ琴姉ものめり込むわ……まあ俺もハマったんだけどな

集合場所は……あそこか

「おーいお前ら」

「あ、やつと来た」

「遅いぜユーマ」

「いや、逆に和人達早すぎるわ、なんだ？瞬間移動でもしたのか？」

「いや流石にできねーからなそんな事、ってゆーか和人じゃなくて

キリトな、ゲーム内ではリアルのことは言うなよ」

「悪いな、まだ慣れてなくてリアルネーム呼んじやうんだよ

なるべく気おつけるからさ」

「もー早く慣れてよね、じゃないとリアルの情報にダダ漏れなんだから、あ、私のゲーム内の名前はツムギだからよろしくね」

「ツムギちゃんもリアルネームと同じなのね……」

呼び方変わらねーじゃねーか、まああまり気にしなくてもすむ

から楽かな？

「だって何も思いつかなかったんですもん」

「まあリアルネームがつむぎなんて奴あまりいないから大丈夫だろ」

「それもそっか」

「納得しちやうんだ……」

「まあ全員集まった事だし無駄話は、辞めて

レベルリングしに行こうぜ」

「無駄話じゃ無いよー、まあいいけど」

「じゃあとりあえず自分の武器決めに行こうぜ」

「そうだね」

何にしようかなと、みんなは決めるのはやいな、俺はゆっくり決めようつと、片手直剣でもいいんだが両手槍とかも捨てがたいんだよなー あ、この片手槍つてやつアラタが使いそうだな……つて

「zzz……」

なんか寝てる奴がいるんだが……

「おい寝てるとログアウトするぞー」

「……zzz……」

「いや起きないんだけど……」

周りに誰かこいつの知り合いいいなのか？

流石に面倒見きれ無いぞ

「ここにいたか」

「？こいつの知り合いか？」

「ああ、悪いなよくそいつ寝るんだよ」

「いやヤベーなどんだだけだよ買った物持って立ちながら寝るつて」

「ハハハ………迷惑かけて悪い」

「別に大丈夫だぜ……えーとそちらの名前は？」

俺はユーマだ」

「悪い名乗って無かったな俺はハジメだ

そつちの寝てるのがチアキだよろしく」

「おうよろしく、ていうか起こさなくていいのか？そいつ」

「ああそつか……チアキ起きろ、ログアウトしちまうぞー」

「んにゃ………日向くん？」

いやバリバリアルネーム言ってるし

「いやゲーム内だからハジメな、というか

「寝るなよログアウトしちゃうぜ」

「寝てない……と思うよ」

「いや寝てたろ、こいつが見つ付けてくれなかったら

ログアウトしてたぜ」

「そうなの？」

「そうだよ」

「そっかありがとう」

「別に大丈夫だよ」

「そうだハジメくんこの人と一緒に行こうよ

優しい人だし2人いた方がきつと楽しいよ？」

「こっちは結構人数いるんだそれでもいいならいいよ」

「どうするハジメくん？」

「いや流石に迷惑だろ2人も増えるのは」

「別に大丈夫だよ人数が多い方が楽しいからな」

「そうか、じゃあお言葉に甘えて」

「おう」

2人増えたなつとツムギが来たな

「ユーマくん武器決まった………つてなんか増えてる」

「おーツムギか一緒に行く事になったハジメとチアキだよろしく」

「いやいや地味にいきなりすぎるよ」

「人数いた方が楽しいだろ」

「まあそうだね、ならいつか」

「良いのかよ………」

「ああこいつはツムギな」

「いや地味に紹介が雑だよユーマくん」

「ははは、まあいいだろ別に」

「もー……まあいいけどさ、つていうか武器決めたの？」

「いやまだだけどツムギは決まったのか？」

「まあね、私はとりあえず細剣にしたよ、

細剣と短剣を一緒につかえるようになりたいから

とりあえず先に細剣を取ったよ、まあ銃があれば

「一発で銃選ぶんだけどなー」

「いや銃があつたら遠距離最強になるわ」

「そっこーでこのゲーム終わりそうだな銃があつたら」

「まあそうだろうな、それだどつまんないから」

「まあいいんだけど」

「まあそうだね、まだ決まりそうに無い？」

「うーん迷うんだよなー色んな武器を使いたくて」

「ちなみにハジメとチアキは武器なんだ？」

「私は短剣だよ」

「俺は片手直剣だ、色んな武器を使いたいんなら」

「とりあえず片手直剣したらいいんじゃないか？」

「それもそうだな、そうするよ」

「ツムギ達と話して決めたからツムギ達に感謝だな」

「そうだな、っと琴姉じゃなかったフィリア達も」

「待ってると思うから行こうぜ」

「そうだね」

「どれぐらい人がいるのかな？」

「チアキ楽しそうだな」

「うん」

「おせーぞユーマ……って増える」

「悪いな選ぶのに迷ってな、って誰だ？そいつら？」

「いやなんかベータテスターってバレたらしく

レクチャー頼まれたんだよ、ってそれはお前らもか」

「いや俺たちの方は一緒にやろうってなったただだよ」

「そうなんだな、まあこちらから紹介するかクラインから頼む」

「おう！俺はクラインってもんだよろしくな！」

「俺はソウダだよろしく」

「……………アスナ」

若干1名無愛想なかたがいるんだが

「ま、まあよろしく頼むわ」

「お、おうよろしくな、ってかなんかクラインと、ソウダってなんか雰

囲気が似てるな」

「「そうか？」」

「まあ地味に似てる感じはするよね」

「遅いわよユーマ！」

「まあまあ」

「悪い悪い、…………ゲーム内の名前何？」

「あれ？言ってなかったっけ？クレハだよク・レ・ハ、覚えてね」

「私はクレアね以後お見知り置きを」

「俺はカゲだ覚えておけよ」

「了解したよ。…………ところで流石にこの人数だし

メンバー分けようぜ」

「そうだね」